

幼児教育実習での経験録をもとにする調査

Research Based on Experience Records in Teaching Practice in Kindergarten

開 仁 志
Hitoshi HIRAKI

〈要旨〉

筆者は、今までに幼児教育実習における経験録（試案）を作成した。経験録は、学生が実習で経験した内容をチェックリスト方式で確認し、後の学びに生かしていくものである。これまで、3年次の附属幼稚園における教育実習後に経験録（試案）を使用し、学生の経験内容を明らかにしている。本研究では、3年次の幼児教育実習Ⅰでの経験と、4年次の外部幼稚園における幼児教育実習Ⅱの経験を比較検討し、分析・考察を試みた。

その結果、幼児教育実習Ⅰよりも幼児教育実習Ⅱで経験する内容が増加することが明らかになった。しかし、中には幼児教育実習Ⅰのほうが実施率が高い項目があったり、地域・家庭との連携では幼児教育実習Ⅰ・Ⅱ共に低い実施率であったりすることから、幼児教育実習Ⅰ・Ⅱを通してバランスよく経験内容を増やすこと、実習以外でも子どもと関わる経験を増やす機会を設けること等が課題となることも明らかになった。

〈キーワード〉

幼稚園 教育実習 経験録 振り返り

1 問題

教員養成に関して、振り返りは重要な課題となっており、学びを振り返るツールとして、「履修カルテ」が文部科学省より示されている⁽¹⁾。履修カルテは、①履修状況の確認、②必要な資質能力に関する評価の2種類があり、前者は教職関連科目を履修したか否か、後者は資質能力が身に付いているか否かを問うものである。

しかし、ここで課題となるのは、資質能力を身につけるためには、前段階として具体的にどのような経験が必要かということである。いわば、履修の有無、資質能力の習得という結果に至るまでの過程を明らかにすることである。

そのような課題に答えるためのツールとしては、「経験録」が考えられる。看護師養成^{(2) (3) (4) (5)}、介護福祉士養成⁽⁶⁾等では「経験録」が既に活用されている。経験録は、学生が実際に経験した内容をチェックリスト方式で確認し、後の学びに生かしていくものである。

筆者は、この経験録を保育分野に応用するため、今までに保育士養成の保育実習Ⅰにおける経験録⁽⁷⁾、保育実習Ⅱにおける経験録⁽⁸⁾、幼稚園教員養成の幼児教育実習における経験録⁽⁹⁾の試案を作成した。

さらに、幼稚園教員養成の幼児教育実習における経験録（試案）を、金沢星稜大学人間科学部こども学科（以下本

学）3年次の幼児教育実習Ⅰ（附属幼稚園における2週間の教育実習）終了後の振り返りで使用し、実習で経験した内容を明らかにした⁽¹⁰⁾。

だが、3年次における幼児教育実習Ⅰの振り返りに使用したのみであり、4年次の幼児教育実習Ⅱでの振り返りに使用した調査結果は得ていなかった。3年次と4年次の幼児教育実習を見通して経験した内容を明らかにすることで、幼児教育実習での経験を総合的に振り返り、今後の教育実習指導に生かすことができると考える。

2 目的

3年次の幼児教育実習Ⅰと4年次の幼児教育実習Ⅱで経験した内容を比較検討し、経験する内容の違い、2年間を通して経験した内容、未経験のまま残っている内容を明らかにし、今後の教育実習指導における示唆を得る。

3 方法

3-1 分析対象者

本学で幼児教育実習Ⅰ・Ⅱを履修した学生16名。（女子14名、男子2名）

※幼児教育実習Ⅰのみ受講し、幼児教育実習Ⅱを受講しなかった2名については、今回除外した。

3-2 調査方法

学生には調査の趣旨と概要、回答は成績その他に影響しないことを説明し、同意を得て以下のように実施した。

- (1) 幼児教育実習Ⅰ（以下教育実習Ⅰ）における経験録
教育実習Ⅰ2単位（2014年9月8日から19日の内10日間実施）終了後、事後の指導において、教室で一斉に経験録（試案）を配布し回収した。
- (2) 幼児教育実習Ⅱ（以下教育実習Ⅱ）における経験録
教育実習Ⅱ2単位（2015年6月1日から12日の内10日間実施）終了後、事後の指導において、教室で一斉に経験録（試案）を配布し回収した。

3-3 調査項目

調査項目は、大項目5、中項目13、小項目102となっており、小項目について以下の区分で経験したもの全てにチェックもしくは記号を記入する。

- (1) 説明 指導者あるいは担当教員からそれぞれの項目について説明を受け、理解できた。
- (2) 見学 指導者あるいは担当教員からの説明を受け、実践を意図的に見学した。
- (3) 経験 説明、見学を踏まえた上で自分で
 - A 指導者あるいは担当教員と共に実践した。
 - B 指導者あるいは担当教員の確認のもと一人で実践した。

3-4 分析方法

経験状況について各項目を単純集計し、経験A「共に」及び経験B「一人で」実践した学生合計数の割合を「実施率」として示した。

4 結果

4-1 幼児理解（中項目3、小項目12）

幼児理解については、教育実習Ⅰより教育実習Ⅱの実施率が同程度か大幅に増え、5割を超えた項目が、2項目から8項目になっている。

一方、教育実習Ⅱでも「5領域の記録」13%「障がいのある子どもの発達過程」38%「障がい児保育の理解と保育の展開」31%と5割に満たない実施率に留まっている項目もある。

項 目			教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
			実施人数	実施率	実施人数	実施率
幼児理解	子どもの発達理論	①配属クラスの子どもの発達過程	5	31%	13	81%
		②一人ひとりの発達過程	5	31%	12	75%
	子どもの育ちと記録のとり方	①一人ひとりの特徴	6	38%	12	75%
		②日々の様子の違い	6	38%	12	75%
		③内面の理解	5	31%	11	69%
		④育ちの理解	5	31%	11	69%
		⑤子どもの様子の記録	8	50%	13	81%
		⑥5領域の記録	1	6%	2	13%
		⑦生活の記録	8	50%	8	50%
	広汎性発達障害（含）特別支援教育がい	①障がいのある子どもの発達過程	2	13%	6	38%
		②障がい児保育の理解と保育の展開	2	13%	5	31%
		③障がいのある子どもとのかわり	3	19%	7	44%
	全体の実施率		56	29%	112	58%

図1 幼児理解についての実施率

4-2 専門職としての役割（中項目1、小項目11）

専門職としての役割でも、全ての項目で同程度もしくは実施率が増えた。教育実習Ⅱで初めて5割を超えた項目は「教師の一日の業務内容の把握」56%「報告・連絡・相談」81%「チーム保育」50%である。まだ50%を超えていない項目は、「子育て支援」38%のみとなった。

項 目			教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
			実施人数	実施率	実施人数	実施率
専門職としての役割	教師の役割	①実習生の自己紹介	15	94%	16	100%
		②ふさわしい身だしなみ	14	88%	13	81%
		③明るく元気な挨拶	14	88%	14	88%
		④子どもの保育	9	56%	13	81%
		⑤子育て支援	2	13%	6	38%
		⑥教師の一日の業務内容の把握	5	31%	9	56%
		⑦報告・連絡・相談	7	44%	13	81%
		⑧指示された仕事の責任ある遂行	11	69%	12	75%
		⑨保育者の行動の背景にある意図について、質問し、理解	8	50%	13	81%
		⑩自分の意見をもった教師との話し合い	10	63%	12	75%
		⑪チーム保育	5	31%	8	50%
	全体の実施率		100	57%	129	73%

図2 専門職としての役割の実施率

4-3 保育の計画と実践（中項目4、小項目48）

「午睡」「紙芝居の読み聞かせ」で若干実施率が減ったが、全体的に教育実習Ⅱの実施率が同程度もしくは増加した。まだ教育実習Ⅱでも実施率が5割未満の項目は、「幼稚園教育要領の理解と保育の展開」38%「教育課程の理解と活用の実践」19%「午睡」0%「紙芝居の読み聞かせ」19%「ペープサート」31%「エプロンシアター」13%「さまざまな楽器の演奏」0%「言葉遊び」25%「絵画表現」44%である。

項 目		教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
		実施人数	実施率	実施人数	実施率
保育の計画と実践	保育実践理論	①実習園の保育方針の理解と保育の展開	6 38%	11 69%	
		②一人ひとりの名前の把握	13 81%	14 88%	
		③一人ひとりへの声かけ	14 88%	15 94%	
		④一人ひとりの話の傾聴	14 88%	15 94%	
		⑤一人ひとりとの会話	14 88%	15 94%	
		⑥一人ひとりの居場所	5 31%	12 75%	
		⑦動線に配慮した環境	8 50%	8 50%	
		⑧体を十分に動かして遊べる環境	11 69%	12 75%	
		⑨探索活動が十分にできる環境	6 38%	9 56%	
		⑩興味、関心が高まる魅力的な環境	8 50%	10 63%	
		⑪一人遊びがじっくりとできる環境	9 56%	9 56%	
		⑫友達とのかかわりが生まれる環境	9 56%	12 75%	
	教育要領と指導計画	①幼稚園教育要領の理解と保育の展開	2 13%	6 38%	
		②教育課程の理解と活用の実際	4 25%	3 19%	
		③指導計画の理解と活用の実際	9 56%	10 63%	
		④指導計画と保育内容の関係	12 75%	11 69%	
		⑤保育のねらいと内容との関係	9 56%	11 69%	
		⑥登園	13 81%	15 94%	
		⑦身支度	13 81%	14 88%	
		⑧遊び	13 81%	14 88%	
		⑨片付け	12 75%	15 94%	
		⑩集まり	13 81%	14 88%	
		⑪おやつ	6 38%	8 50%	
		⑫食事	13 81%	16 100%	
		⑬衣類の着脱	12 75%	13 81%	
		⑭排泄	10 63%	12 75%	
		⑮午睡	3 19%	0 0%	
		⑯年齢別活動	7 44%	13 81%	
		⑰異年齢活動	5 31%	10 63%	
		⑱降園	13 81%	14 88%	
	保育の実践	①手遊びの指導	13 81%	14 88%	
		②絵本の読み聞かせ	15 94%	15 94%	
		③紙芝居の読み聞かせ	6 38%	3 19%	
		④ペープサート	5 31%	5 31%	
		⑤パネルシアター	5 31%	8 50%	
		⑥エプロンシアター	2 13%	2 13%	
		⑦歌遊び	10 63%	9 56%	
		⑧ピアノの演奏	12 75%	10 63%	
		⑨さまざまな楽器の演奏	1 6%	0 0%	
		⑩ごっこ遊び	10 63%	12 75%	
		⑪言葉遊び	3 19%	4 25%	
		⑫絵画表現	4 25%	7 44%	
		⑬造形表現	10 63%	12 75%	
		⑭身体遊び	14 88%	13 81%	
		⑮リズムを伴った遊び	7 44%	8 50%	
	自己評価と研修	①実習目標と反省・評価の記録	14 88%	14 88%	
		②教師（指導担当教員）の助言、指導の受け止め	13 81%	15 94%	
		③教師（指導担当教員）からの注意や指摘の受け入れ	13 81%	14 88%	
		全体の実施率	443 58%	506 66%	

図3 保育の計画と実践の実施率

4-4 子どもの人権理解（中項目2，小項目21）

「寝かしつけ」「衣類の着脱への働きかけ」では若干実施率が下がったが、他の項目では実施率が同程度もしくは増加した。教育実習Ⅱで実施率が5割に満たない項目は、「一人ひとりの服装、頭髪、皮膚、爪などの清潔さ」44%「おもむつ交換」38%「寝かしつけ」0%である。

項 目			教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
			実施人数	実施率	実施人数	実施率
子どもの人権理解	子どもの人権	①分かりやすい温かな言葉	13	81%	14	88%
		②気持ちの受け止め	13	81%	15	94%
		③せかす言葉、制止する言葉を不必要に用いない	9	56%	11	69%
		④性差への先入観による固定的な対応をしない	5	31%	8	50%
		⑤自分の意見を言うことのできる雰囲気づくり	8	50%	12	75%
		⑥他の子どもの気持ちや発言を受け入れられるような雰囲気づくり	8	50%	11	69%
	子どもの健康と安全	①視診	5	31%	10	63%
		②一人ひとりの健康状態の確認	4	25%	9	56%
		③幼児の表情や泣き声の読み取り	4	25%	9	56%
		④スキンシップ	8	50%	12	75%
		⑤一人ひとりの服装、頭髪、皮膚、爪などの清潔さ	5	31%	7	44%
		⑥実習生自身の服装、頭髪、皮膚、爪などの清潔さ	11	69%	13	81%
		⑦事故やけがの発生の防止	8	50%	12	75%
		⑧事故やけがの発生時の報告、対応	8	50%	11	69%
		⑨おもむつ交換	0	0%	6	38%
		⑩おもらしをしたときの配慮	4	25%	9	56%
		⑪寝かしつけ	2	13%	0	0%
		⑫衣類の着脱への働きかけ	14	88%	10	63%
		⑬手洗いやうがいへの働きかけ	12	75%	13	81%
		⑭大型遊具等の使用方法、順番の伝え方	7	44%	11	69%
		⑮ハサミやナイフなどの道具の使い方	11	69%	10	63%
		全体の実施率	159	47%	213	63%

図4 子どもの人権理解の実施率

4-5 地域、家庭との連携（中項目3，小項目10）

「ほめ方、叱り方の指導援助」以外の項目で教育実習Ⅱの実施率が同程度もしくは増加した。しかし、教育実習Ⅱでも実施率が5割以上に達しない項目が多い。5割以上に達した項目は、「登園時の保護者とのかかわり」56%「その子の良さの発見」69%の2項目のみに留まった。

項 目			教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
			実施人数	実施率	実施人数	実施率
地域、家庭との連携	ユニバーシティの保護者とのコミュニケーション	①登園時の保護者とのかわり	2	13%	9	56%
		②降園時の子どもの様子の伝え方	0	0%	3	19%
		③家庭への連絡（連絡帳等）	0	0%	1	6%
	家庭教育部における保護者支援	①生育暦と生育環境への理解	2	13%	3	19%
		②その子の良さの発見	10	63%	11	69%
		③家庭教育への理解	0	0%	7	44%
		④虐待ネグレクトの理解	0	0%	0	0%
		⑤ほめ方、叱り方の指導援助	10	63%	5	31%
	地域の連携	①地域社会との交流の意義と実践	2	13%	4	25%
		②幼保小の連携	0	0%	1	6%
	全体の実施率		26	16%	44	28%

図5 地域、家庭との連携の実施率

5 考察

大項目ごとにまとめた全体の実施率の変化を見てみると以下ようになる。なお、全体の実施率は、全員が全項目を実施した場合を100%として算出した。

幼児理解は29%から58%、専門職としての役割は57%か

ら73%、保育の計画と実践では58%から66%、子どもの人権理解では47%から63%、地域・家庭との連携では16%から28%に変化が見られた。このことから、全体的に見て、教育実習Ⅰより教育実習Ⅱのほうが、さまざまな経験を積む機会があることが明らかになった。これは、基本としての教育実習Ⅰを踏まえた応用としての教育実習Ⅱという位置づけから、1日実習としてクラス担任の仕事の一端を担う等、様々な役割が求められるため、経験する内容も増えるからであると考ええる。

しかし、中には教育実習Ⅰのほうが実施率が高い項目があったり、地域・家庭との連携では教育実習Ⅰ・Ⅱ共に低い実施率であったりすることから、教育実習Ⅰ・Ⅱの段階を踏まえつつ、総合的にバランスよく経験内容を増やすこと、実習以外でも子どもと関わる経験を増やす機会を設けること等が課題となる。

今回の研究では、本学で教育実習を履修した16名を対象としたため、サンプル数が十分とは言えない。今後は、継続的な調査や他の幼稚園教員養成校での経験録使用も視野に入れて、実態をさらに明らかにしていく必要がある。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省、教職課程認定申請の手引き及び提出書類の様式等について、05 参考、履修カルテ（例）について。（教職課程認定申請の手引き（平成26年度改訂版）抜粋）
- (2) 杉本幸枝・土井英子・中山亜弓（2006）「基本的な看護技術の水準」における経験度からみた看護技術演習の検討、新見公立短期大学紀要第27巻、57-65.
- (3) 郡司理恵子・安藤悦子・岡田純也・川波公香・浦田秀子・寺崎明美（2006）成人看護学における技術教育についての検討—成人看護学実習における看護基本技術の経験状況から—、保健学研究19(1)、27-35.
- (4) 成田恵美子・渡邊竹美・糠塚亜紀子・篠原ひとみ・兒玉英也（2007）母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査、秋田大学医学部保健学科紀要15(1)、58-67.
- (5) 荒川千秋・神原裕子・吉野由紀江・佐藤亜月子・杉本龍子・関根龍子（2009）基礎看護技術実習における看護技術の経験の実態—平成18年度と平成19年度の看護技術経験録から—、目白大学健康科学研究第2号、73-80.
- (6) 井上理恵・石橋郁子・松井紀久子・関好博・西井啓子（2013）施設介護実習での到達度に関する研究～経験録の項目をもとにした調査～、富山短期大学紀要第48巻、1-15.
- (7) 開仁志（2014）保育実習における経験録（試案）、富山国際大学子ども育成学部紀要第5巻.
- (8) 開仁志（2015）保育実習Ⅱにおける経験録（試案）、金沢星稜大学人間科学研究第8巻第2号、17-22.
- (9) 開仁志（2014）幼児教育実習における経験録（試案）、金沢星稜大学人間科学研究第8巻第1号、23-28.
- (10) 開仁志（2015）経験録を活用した振り返りに関する一考察、日本保育学会第68回大会発表要旨集.